巻頭言

「名村テクニカルレビュー」第２５号発刊に際して

執行役員　松永　邦輔

本誌“名村テクニカルレビュー”は四半世紀にわたって途切れることなく発行され続けています。これは忙しい中、筆を振るってくれた執筆者の皆さんと WIN21 推進部の惜しみない尽力のお陰です。技報として出発した本誌が、その枠組みを超え発行され続けていることは当社が誇るべきものだと感じています。

まず怒りがあります。疫病は収まるどころか繰り返し流行しています。どういう理由にせよ一般市民の流血を伴う戦争も起こりました。「これで良いのか、これが 21 世紀なのか」良いはずがない。何かが間違っている、と憤らずにはいられない。こういう時代背景は私たちが経験したことのないものです。

脱炭素が既定路線となり、私たちは大きな転換期に差し掛かっています。環境を守るために、延いては地球を守るために出来ることをしなければならない。頭では理解していても、時に理解を超えた規制や基準に憤然とすることもあります。「昔は良かった」などと言いたくはありませんし、そう思ってもいません。

本誌掲載の論文の多くは調査研究開発を起点としたものです。様々な分野の研究が行われ当社の技術基盤になっていることは大変心強く思います。

技術は人類が車輪を発明してからずっと途絶えることなく進化し続け、現在に至っています。私が入社した時代には携帯電話すら珍しい存在でしたが、今や携帯型パソコンとでもいうべきタブレットやスマートフォンを個人が持つようになりました。それらの技術革新は魔法のようにも感じられますが、今号で特集しているスマートファクトリー化においては、もはや常時利用が前提の必須ツールとなっております。

当社でも水素燃料電池船、二元燃料対応の LPG、LNG、アンモニア運搬船など時代の要請に応えた方針を打ち出しています。これは魔法ではありません。だからこそ私たちの技術力で勝負していかなければなりません。

歴史が究極的には技術の進歩により発展する、であるならば私たちもまたその歴史の流れの中にあります。新しいものに興味を持ち、自分の仕事に応用できないかと想像する（時に妄想する）そして、日々の仕事の中でも改善という“技術的進歩”を追求する。それを決して止めることなく前進し続けること。目線を一段上げて仕事中の休憩時間に「こんな技術があれば」「あれを仕事に使えないか」仲間と言い合えればそこが技術革新の原点となります。

文化や社会は栄枯盛衰を繰り返しますが、技術だけは進歩し、発展し続けています。私たちはその技術を基盤とし、そこに立っているのです。

最後に本誌ご愛読の皆様からのご意見を励みにしつつ、私たちの行動に資するテクニカルレビューであり続けたいと思っております。